



第七十九号
会報
浄土真宗
太陽の会

「春の彼岸会報告」

3月20日(水)春の彼岸会を開催しました。当日は、あいにくの天気となりましたが、多くの会員様にお参り頂くことができました。亀谷好慧先生を導師に迎えて読経と法話をいただきました。

お彼岸とは、さとりを開いた状態を意味する言葉です。古来より仏教では東から西に沈む太陽の軌跡を移り変わる人生



に喩えて朝日の昇る東の方向にいのちの誕生を見つめ、夕日の沈む西の方向に命が終わる死を感じてきました。それは現代でも、人生の終わりを晩年と表現することからも想像できます。春分と秋分は、太陽の軌跡が真東から真西に移動することから西方極楽浄土を願生することに最も適した時期であるとされています。

「竜王別院読経会」

竜王別院では、毎月読経会を開催し会員様と読経を通して仏教の信仰を深めていただいています。本年度は坂村真民氏の書かれた詩を集まった皆さまと読み進めながら、日常の中での仏教のみ教えをお話しさせていただいております。

「積み重ね」 坂村真民

花は一瞬にして咲かない
大木も一瞬にして大きくならない
一日一夜の積み重ねの上
その栄光を示すのである



毎月11日に読経会とさせていただき、多くの皆さまとの信仰を深める場とさせていただきます。

「令和六年 行事予定」

○本山(福山)

盂蘭盆会 八月十二日(月)

午前の部 開式 十時半

午後の部 開式 十三時

○竜王別院(広島)

読経会

五月十三日(月) 九時

六月十一日(火) 九時

七月十一日(木) 九時

八月十三日(火) 九時

○川上太陽霊園(鹿児島)

盂蘭盆会 八月十二日



「紫式部〜源氏物語〜」

紫式部は平安時代中期、父は藤原為時、母は藤原為信の子として生まれ、幼少の頃より漢文を読みこなし才女としての逸話も多く残っています。彼女の著作として代表的な『源氏物語』ですが、生涯で唯一の物語となります。当時20代後半で藤原宣孝と結婚し一女をもうけましたが、その3年後夫と死別し、物語を書き始めたと言われています。

『源氏物語』は、主人公の光源氏を通して、恋愛、栄光と没落、政治的欲望、権力闘争等、平安貴族社会を描いています。20世紀の初め翻訳本が出て世界の人々も11世紀初頭の女性が長編物語を書いたという事実です。同じ時代のヨーロッパで女性が同じような長編物語を書くことは考えられませんでした。リアリティのある内容や漢文の引用もあり紫式部の教養の高さは世界からも評価されています。今年は注目を集める年になりそうですので、『源氏物語』を詠んだことのない方は是非読み進めてみてはいかがでしょうか。

教えて仏事の事④

「初七日法要のしつぽるのそら」

お葬式が終わると故人がなくなつて7日目に初七日法要があります。これは中陰法要とも言いますが、四十九日目を満中陰というのはご存知の方も多いと思います。

中陰の日の数え方は、亡くなった日を1日目として、7日目が初七日です。例えば4月3日に亡くなれば、4月9日が初七日で、満中陰まで同じ曜日で中陰参りを行います。ただ実際の法要は速夜といつて前日に行うことが多く初七日は4月8日、二七日以降も一日早くお勤めすることに なります。

いずれにしても、お葬式から初七日までの日数は短いのです。4月3日に亡くなれば、お通夜は4日の夜、葬儀は5日になることが多く、更に火葬場や斎場の関係で数日先に執り行うことも最近では増えてきています。それもあつてか、初七日を繰り上げて、葬儀のお骨上げのときに、還骨の法要と一緒につとめることもあります。むしろそれなら良い方で、葬

儀式直後の初七日もまかり通つてしまつている状況です。

しかし、間違つてもらつては困るのは、還骨の際に初七日をおつとめしたり、葬儀式直後の初七日をおつとめするのは、やむおえない場合であつて、それをあたりまえにしてはいけないということです。初七日は初七日の日に当たり前につとめるのが本当なのです。

気になるのは、病院で亡くなつてすぐに式場に運ばれそのまま、通夜・葬儀となり、さらに還骨まで式場で行われる場合です。せめて初七日は生前に暮らされていた自宅に帰つてつとめていただきたいと思ひます。

なんでも簡略化されるといふ時代になつてきて、形ばかりが優先されて、意味が失われてしまうという事態になつてきました。葬儀に關していえばその発端は、還骨の際に初七日をおつとめしたり、葬儀式直後の初七日をおつとめするようになり、それが当たり前になつてしまつたことです。一度崩してしまえば、なし崩し的になるといふ悪い例です。今後の簡略化には歯止めをかけた方がいいものです。

「クイズ浄土真宗」

Q お寺にお参りするときの心得は？

- ① お布施を忘れないこと
- ② 地味な服装を心掛けること
- ③ 勤行だけではなく、法話も聞いて
仏さまのお心に包まれること

お寺で勤める法要にあまり参加されたことのない方は、お布施や志をどの程度包んだらいいのか気になることでしょうか。また、お寺参りには「志」というお布施がつきものように思われる方もいることでしょうか。さらには、どんな服装でお参りすればよいのか、その恰好をきにされる方も多いのではないのでしょうか？



しかし、あまり心配されなくてもけっこうです。「志」はあくまで自分の志です。人に合わせる必要はありませんし、

なければしなくてもいいのです。ただ、気持ち的には「精一杯する」といったところを忘れないようにしていただきたいところですよ。

服装も礼服から略装までありますが、必ずしも地味である必要はなく、慶び事の法要の場合は、当然華やかな服装で良いこととなります。気になれば、お寺に直接聞かれると良いでしょう。

それよりも肝心なのは、誰のための、何のための法要かを押さえておかなければなりません。それは、報恩講の心得と同じく、私自身のために、私自身が「信心を得る」ためです。それは、すなわち阿弥陀仏の本願のいわれを聞いて、仏さまの私に向けられた大悲のお心に包まれることにほかなりません。悩みを抱えて生きる私を放っておけないのが仏さまです。その仏さまに出遇うのが法要です。

Q お寺にお参りするときの心得は？

クイズの答え・③

「歎異抄を読む」

『歎異抄』は、親鸞聖人が亡くなった後、門弟の間に真実の信心に背く異議が生じたことから、聖人から口伝を受けた著者が、同心の行者の不審を除くために著した親鸞聖人の言語録です。



弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候か。

釋蓮如（『歎異抄』第二条）

永遠の真実が

今ここに届いている

釈尊や高僧が言われたから真実なのではない。真実そのものが、釈尊や高僧を通して現れているからこそ、真実なのである。だから、その真実を受け容れられている親鸞聖人の言葉も空しいものではない。

「一月～四月の言葉」

太陽の会では、館内入口・本堂入口に「月のことば」を掲載させて頂いております。お経は難しいと思われる方もいらっしゃると思いますが、身近なやさしいお言葉として皆様のお心で味わって頂けたら幸いです。

【一月のことば】

帰ってゆくべき世界は
今遇う光によって知らされる

「浅井成海」

かえってゆく世界とは、いわば光り輝く清浄の世界であり、そしてそれは単に光り輝く世界としてあるのでなく、再びこの娑婆に帰って苦悩の衆生を救うというはたらきをする世界であると明かしているのです。さらに「今遇う光」とは如来の本願を聞いて疑いがないことを信心といわれるように、光り輝くさとりの世界を教示する仏、すなわち阿弥陀仏を具体的に顕現する名号に出遇うということであろうと思われまます。つまり、遇いが

たき聖典や高僧の教えに出遇い私たちの「帰ってゆくべき世界」を知らされるのです。

【二月のことば】

念仏をはなれて
仏もなく自分もない

「金子大栄」

念仏は、一般用語としても存在します。それは私の救いとは無縁の存在としてのことばです。そのような私の救いと無縁の念仏は、歴史的に伝えられてきた仏の名前であり、それは知識としての仏名の言葉ではないでしょうか。しかし、ひとたび私の救いが問題になってきたときに発する念仏は、私を救い取ってくださいという念仏です。このようなありようを表現されているのだと考えさせられます。

【三月のことば】

南無阿弥陀仏が
私の救われるしるしであり
証である

「様實圓」

南無阿弥陀仏は、衆生に先立つて真実を証明するものであり、同時に真実そのものであるのです。すなわち、衆生に先立つ真理に基づく阿弥陀仏の真実のありようを、念仏は真実を証明するしるしである。つまり、「証」すなわち真実そのものであるといわれたのでしよう。

【四月のことば】

まことに浄土真宗とは
聞法がいのちであった

「近田昭夫」

聞法とは、法を聞くこと。法とは仏さまの教え。仏さまの教えとは本願のことです。聞法とは、私が南無阿弥陀仏と称えて生きることについて、「仏さまの最も大切な願いが、私に実現していることである」と聞くことです。念仏を称えていることは、仏さまの本願の心が私の上に実現していること。そのように聞き容れながら生きる事が浄土真宗そのものです。そうした聞法の大切さを、師は「いのち」とおっしゃるのでしよう。私が念仏を称え生きることが、仏さまの「いのち」なのです。